

汉日语歧义句的比较研究

中日両言語における多義文についての比較研究

氏 名： 王 珍

学籍番号： 2015m42002

要 旨

多義文は一つの文には二つあるいは二つ以上の意味がある現象である。中国語の多義文は、学界で重要な研究課題の一つである。しかし、先行研究は多義文を消極的な、文法構成から離れた言語現象と考えており、使用中にできるだけ避けるように注意すれば、いいような実用的な研究に止まっている。本論で、多義文は、言語の形式と内容との様々な複雑な関係を反映しているので、それに対する研究は言語システムの解明に役に立ち、文構成への究明にもとても有益であると考えている。朱德熙（1962）は、「一種の言語として、その文法システムに潜在している微妙なところは往々にして多義文に映り出された。」と述べた。従って、多義文の研究は、一つの言語形式で複数の意味内容を表す可能性を考察することができ、同一形式の深層的構造による相違の考察を通して言語形式と言語内容との複雑な対応関係を深く認識することができると思われる。

日本語と中国語は、いろいろな相違点があり、多義文はその一つである。一部の類似点があるが、完全に対応するというわけではない。本論では「語音多義文」、「語彙多義文」、「文法多義文」、「語義多義文」、「語用多義文」など五章に分け、両言語における多義文の比較研究を行った。研究方法としては、まず中国語の多義文を分類し、それに参考し、日本語の多義文を分析する。そして、比較の視点から両言語の多義文の形成条件を考察し、相違点をまとめてみる。例文に対して、以下の方法で考察分析を行う。中国語を原語、日本語を訳語として、（1）原語に多義あり→訳語に多義あり、（2）原語に多義あり→訳語に多義なし、（3）原語に多義なし→訳語に多義あり、という方法である。この研究は中日両言語の教育・習得だけでなく、教科書や辞書などの作成にも参考資料になる。また、機械翻訳において、言葉のコンピューターでの処理などの自然言語の機械処理に役に立つと思う。

本文は、以下のように構成されている。

「はじめに」の部分では、本文の研究対象を提出し、研究の目的・意義・先行研究及び研究方法について論じる。

第一章では、語音によって多義文を分析する。その中で聴覚多義文と視覚多義文に分けられる。具体的は以下のような内容である。

- 1.1 聴覚多義文：同音多義文、対比重音（sentence accent）、軽声、区切り。
- 1.2 視覚多義文

第二章では、語彙によって多義文を分析する。具体的は以下のような内容である。

- 2.1 同形多義語による多義文
- 2.2 「個指・類指」による多義文
- 2.3 転喩による多義文
- 2.4 「同形多品」による多義文
- 2.5 「主動・被動の同語」による多義文
- 2.6 その他

第三章では、文法によって多義文の構造を分析する。主に、語彙と構造の同形、構造関係の差異、スコープの範囲、重層構造など4種類の多義文を討論する。それに、中日両言語の多義文の条件も分析する。具体的は以下のような内容である。

- 3.1 語彙と構造の同形による多義文
- 3.2 構造関係の差異による多義文：述目構造/連中構造、連中構造/並列構造、同位構造/連中構造、連中構造/主述構造、述目構造/並列構造
- 3.3 スコープの範囲による多義文：修飾スコープ、連結スコープ、否定スコープ。
- 3.4 重層構造による多義文：

3.4.1 述語+(名詞連体修飾語+「中心語」) / (述語+目的語)+「中心語」

目的語 連体修飾語

3.4.2 述語+(形容詞連体修飾語+「中心語」) / (述語+目的語)+「中心語」

目的語 連体修飾語

3.4.3 述語+(数量連体修飾語+「中心語」) / (述語+補語)+「中心語」

目的語 連体修飾語

3.4.4 介詞+(連体修飾語+「中心語」) / (介詞+目的語)+「中心語」

目的語 連体修飾語

3.4.5 述語+(連体修飾語+「中心語」) / (述語+補語)+目的語

3.4.6 (同位+同位)+述語/主語+(主語+述語)

主語

述語

3.4.7 V+O₁+O₂

第四章では、主に、語義関係によって多義文の構造を分析する。具体的は以下のような内容である。

- 4.1 定中结构歧义（「連中構造」による多義文）
- 4.2 多視点修饰歧义（「多視点修飾」による多義文）
- 4.3 施事与事歧义（「動作主と関連者」による多義文）
- 4.4 材料容器歧义（「材料と容器」による多義文）
- 4.5 受事目的歧义（「受け手と目的」による多義文）
- 4.6 受事结果歧义（「受け手と結果」による多義文）
- 4.7 受事处所歧义（「受け手と場所」による多義文）
- 4.8 全量差量歧义（「全量と差量」による多義文）
- 4.9 “是……的”结构（「是……的」構造による多義文）
- 4.10 语义指向歧义（「意味関連」による多義文）
- 4.11 非単一激活（「複数活性化」による多義文）

第五章では、語用によって多義文の構造を分析する。コミュニケーションの中で、3つのポイントがある。つまり、話者、聞き手と文脈。文脈は二重性がある。一つは、文脈によって、多義文を消去する。もう一つは、言葉の理解はよく文脈の影響を受けて、コミュニケーションの中で十分に文脈を考えないと、誤解を招くかもしれない。具体的は以下のような内容である。

- 5.1 話題に対する理解の相違
- 5.2 内含 (entailment) に対する理解の相違
- 5.3 前提 (Presupposition) に対する理解の相違
- 5.4 含意 (implicature) に対する理解の相違
- 5.5 認知参照点对する理解の相違
- 5.6 省略多義文

第六章では、本文の多義文の原因と条件をまとめ、今後の研究課題を提出する。

中日両言語において、語音多義文と語彙多義文は普通に存在している。しかし、この両言語は完全に対応しているわけではない。文法多義文において、語彙と構造の同形、構造

関係の差異、重層構造三つの状況で、中国語は多義文がある。重層構造において、“VP+N₁+N₂”構造による多義文は日本語も多義文がある。スコープの範囲において、中国語も日本語も多義文がある。語義多義文において、中国語はもっと複雑になっている。語用多義文において、中日両言語の多義文は普通に存在している。

キーワード：多義文 同形 比較 条件